

れきし 散歩

文学でたどる鈴鹿関 ～『枕草子』から～

はじめに

歴史博物館では昨年10月から、第25回企画展「鈴鹿関」を開催しています。1月4日からは第2部「姿を現した鈴鹿関」が始まりました。

そこで今回は、延暦8(789)年に古代国家が重要と位置づけた三関(伊勢鈴鹿関・美濃不破関・越前愛発関)が停廃された後の鈴鹿関について、文学からご紹介します。

枕草子

『枕草子』は、清少納言が記した随筆であり、女流文学の代表作のひとつです。成立時期は長保3(1001)年と考えられています。その内容は、①類聚(そのものを列挙する)、②日記(清少納言が仕えた一条天皇の中宮定子の様子)、③随筆(感想文)に分類されます。

清少納言は『枕草子』の中で、

関は逢坂、須磨の関、鈴鹿の関、岫田の関、白河の関、衣の関。(後略)

と述べています。

この記述方法は、さきほどの分類では、①類聚にあたり、清少納言が「名前」が面白いと感じた関を並べて書いているもので、関の場所や実際の様子などを考えてのものではありません。

清少納言が『枕草子』を書いたときには、鈴鹿関が停廃されてから約200年が過ぎていましたが、「鈴鹿の関」をとりあげており、清少納言がその存在を知っていたことは確かです。

三関の移り変わり

清少納言がとりあげた関に登場する三関は、鈴鹿関のみです。不破関・愛発関は登場しません。代わりに逢坂関が登場しています。

この逢坂関ですが、平安時代に入ると三関のひとつとして扱われるようになります。弘仁元(810)年に起こった薬子の変において、関の門を閉じる「固関」の実施場所である三関としての登場が最初の例です。この時、「伊勢、近江、美濃」に固関を実施する使者を派遣しています。伊勢は伊勢国の鈴鹿関、美濃は美濃国の不破関ですが、愛発関は越前国にありますので「近江」ではありません。



そこで考えられるのが、山城国と近江国の境にある逢坂関です。つまり、この時、三関のひとつが愛発関から逢坂関に変化したのではないかと考えられます。

もうひとつの関

清少納言がとりあげた関の中には、伊勢国内の関が鈴鹿の関以外にもうひとつあります。岫田の関(津市白山町)です。ここは、河口関とも呼ばれています。

河口関は、聖武天皇が藤原広嗣の乱をきっかけに東国へと旅立った際、宿泊した頓宮(仮宮)のひとつである河口頓宮があった場所とも考えられています。

河口関からは重圏文軒丸瓦が出土しています。鈴鹿関でも観音山を調査した第1次発掘調査で、同じ重圏文軒丸瓦が確認されています。どちらも同じ文様の瓦が出土していることが注目されます。聖武天皇は、鈴鹿関付近と考えられている赤坂頓宮にも滞在していますので、どちらも聖武天皇の行幸を契機として用いられた瓦ということもいえるのではないのでしょうか。

どちらの重圏文軒丸瓦も、現在開催中の企画展「鈴鹿関」で展示しています。ぜひ歴史博物館へお越しいただき、実物をじっくりとご覧ください。そして、清少納言も思いをめぐらした鈴鹿関の実像をお楽しみください。